

子どもたちが安心して安全な未来をめざして

平山 雅浩

三重大学大学院医学系研究科 小児科学

超少子化時代で子どもの人口は減少しています。今後の未来を支える子どもたちをいかに守るかが問われています。子どもたちの健やかな成長を達成するには医療はもとより、保健、福祉、教育、行政など全ての力を合わせることが必要かと思います。戦後より、子ども人口は減り続け、少子化の流れは止まりません。そんな中で、子供に対する関わりは教育、医療に加え、保健、福祉へと総合的なニーズへと転換しています。

私は医療の面では小児科一般、特に小児がんの医療に携わってきました。近年の小児がん医療の進歩は目覚ましく、診断技術、治療技術の進歩により、5年生存率は75%まで改善してきています。しかし、そんな中でも25%の子どもたちが亡くなっていく現実もあります。子どもたちががんと闘病していく中でも教育は必要ですし、保健、福祉のサポートは欠かせません。小児がんの子どもを診るにはトータルケアが必要となっています。また、病気を克服した後の長期のフォローアップも重要で、小児がんの分野においても安心と安全がこれからの課題であることは言うまでもありません。

小児の死亡事例は小児がんも含め減少傾向にありますが、病死以外の死亡に着目すると、不慮の事故、思春期での自殺や交通事故が多く、また不詳死に分類されるものもあり、子供の予防可能な死亡も少なくありません。このような中で近年、「予防のための子どもの死亡検証(CDR: Child Death Review)」の調査研究が行われるようになりました。令和2年度から三重県では国のCDRモデル事業に取り組んでいます。このモデル事業の検証を通じて、類似の死亡例などの対策も含めて国への提言につなげる活動を行っています。

また、周産期を含む小児医療の進歩に伴い、以前では救命困難であった子どもの命を救えるようになってきた一方で、気管切開、人工呼吸器等の高度な医療的ケアを長期間にわたり必要とする子どもも増えていきます。小児の在宅医療の特徴は、成人と比較して基礎疾患が多様で、個別性や医療依存度が高く、成長発達を支える視点から医療のみならず福祉及び教育施設との連携が求められる点があります。医療的ケアを必要とする子どもと家族が在宅で安心して暮らすためには、地域医療機関の連携に加え、ライフステージに合わせた福祉・教育・行政機関との協働が必須であります。

このように、一人の子供が成人になるまでには色々な苦難を乗り越えてはじめて成長できることになります。いじめ、虐待、不登校、発達障害、自殺などの多様な課題に対して様々な取り組みが要求されています。そんな中でも、成育基本法が成立し、子ども家庭庁が設置されるなどの明るい兆しも見られます。子どもが安心して健やかな成育をするためにはその支援体制が今後もますます重要となってきています。それには子どもを育む家族や地域でのつながりを大事にすること、子どもと過ごす時間を大事にできること、若い世代が子供を安心して生み育てられる環境づくりができることが今後望まれていると思います。それには国の財政的支援も重要だと思いますし、子供を取り巻く全ての分野の方々の力が大切です。このような多くの課題を前にして、一つ一つ着実に対策し、取り組みを進めて行くことで、その先には子供たちの安心と安全な未来が見えてくるものと思います。必ず、子どもたちと家族が安心と安全な未来を目指せる社会になることを信じて。